

# 悪逆皇帝と騎士

beatkun3

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ルルーシユメアーニヤの二次創作です

注意

この小説は、原作の「コードギアス」がアニメのため、解釈の違いや表現の違い、多少の設定改変などを加えています。苦手な方はブラウザバックをお願いします

また、それに伴い登場人物同士の関係や、呼び名など細部に多少の違いは見られますが基本原作遵守で進めていきます

それでも大丈夫な方は、ぜひ楽しんでみてください

# 目次

原作開始10年前

1話 出会い | 1

2話 崩れた日常 | 5

3話 別れ | 12

3話までの設定、補足 | 21

4話 最悪の出会い方 | 25

5話 決意 | 31

「コードギアス 反逆のルルーシュ」編

6話 平穩の崩れ | 40

7話 王の力 | 48

8話 行動開始 | 57

9話 再会 | 68

10話 2人の逢瀬 | 79

11話 日常と非日常 | 85

12話 暗躍する影 | 94



# 原作開始10年前

## 1話 出会い

1人の若い少年が、美しい庭園で何か困っているようであった。

この少年、名を「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア」と言い、この「アリエスの離宮」で母と妹、それに使用人たちと暮らしているため、迷うことなどありはしない。しかし、アリエスの離宮は庭園といってもとても広く、むしろ野原と言われた方がしっくり来るような作りになっていた。故に、この庭園のある「アリエスの離宮」に初めて入る人間は迷子になってしまう確率がかなり高いのである。であれば、ルルーシュが困っているのは、迷子の誰かを発見してしまっただからであると想像ができる。

ルルーシュは幼いながらも賢い頭脳を持ち、時には大人顔負けの脳の回転を発揮することもあったが、こういったトラブルにはめっっぽう弱かった。

それに、ルルーシュはこのアリエスの離宮で生活してきたため、外に出ることなど数えるほどしかなく、この離宮を訪ねてくる人物も、異母兄弟姉妹が基本で、全く知らない人を見かけるのも初めてのことだったので、困ってしまうのも当然なのだろう。

ルルーシュはついに話しかけることに決めた。自分よりも年下と思えるこの少女は

恐らく誰かに連れられてこの場所に来たが、途中で迷子になってしまった。つまり、この離宮に入ってくる人物の子供である可能性が高く、敵対の危険はない。そう判断した故であった。

その少女は、ピンク色の鮮やかな髪に、質の良い服を着せられていたが、その髪や服にも泥や葉っぱが付いていた。それは正面に偏っていた為、どこかで転んでしまったのだらうと思ひ、ルルーシユがその少女の全身を見ると、膝を擦りむいてしまっていた。「こんな所で何をしてるんだ？」

ルルーシユは少女の手当てをするにも、まずは触れてもいいのかの許可を取らなければいけないと考え、できる限り優しい声を意識しながら少女に声をかけた。少女は泣きながらルルーシユの方を見て

「…迷った」

とだけ言った。

ルルーシユは「そうか」と頷くと、続けて「名前は？」と聞いた。

「アーニヤ。アーニヤ・アールストレイム」

そう少女が答えると、ルルーシユは自分の推理が間違つてなかったことを知った。アールストレイムと言えば、古くから帝国に使える名家であり、それと同時に、「ヴィ」家の支援もしてもらっている家だ。ならば、この少女がここにいるのも納得ができる。

いうものだ。

「アーニヤ、まずは、その膝を手当てさせてもらえないかな？なんでこんな場所にいるのかは、そのあとで話してくれ」

「…分かった」

ひとまずアーニヤの許可を取ると、ルルーシユは来ていた服の袖を破った。続いて、遊んでいる途中で喉が渴いたら飲もうと思っていた水の入った水筒を開け、アーニヤの膝に振りかけた。アーニヤは痛かったのか、先程よりも泣き声が大きくなってしまったが、ルルーシユはその間にも的確な処置を施していく。

「アーニヤ、もう大丈夫だよ」

「…ありがとう」

ルルーシユが処置を終えてアーニヤに話しかけると、アーニヤは泣きながらもきちんとお礼を言い、少しして落ち着いた後、自分が何故ここにいるのかを語って聞かせた。しかし、それは幼い少女の言うことで、「自分が迷ったのではなく、護衛の方が迷っている」と言った発言をして、ルルーシユを笑わせていた。

「おにいさまー！いったいどこにいますかー？」

妹の声だ。ルルーシユは返事をしようとして、いまだに座り込んでいるアーニヤに目を向けた。

「そろそろ妹が僕を探してここに来るはずだ。アーニヤもそこから帰れると思うよ。でもその前に、妹に君を紹介したいんだ。良いかな？」

「…ん」

ルルーシユの申し出に、アーニヤは少し嬉しそうにはにかんで頷いた。それを見たルルーシユは赤面し、アーニヤの方に手を差し出すと「またはぐれたらいけないから、手を繋ごう」と言つて、アーニヤの手を取ると、妹の声のした方向へと向かつていくのだった。

## 2話 崩れた日常

アーニヤはルルーシユと出会った後から、よく一人でアリエスの離宮に足を運ぶようになった。ルルーシユには、妹「ナナリー・ヴィ・ブリタニア」がいるのだが、年齢が同じということもあり、よく遊ぶようになっていた。また、アリエスの離宮に遊びに来るその他の皇女とも仲良くなったようで、遊ぶ姿が度々目撃されていた。

アーニヤは、初めのうちはあまり喋ることを得意としていなかったようで、抑揚の少ない声で聞かれた事に淡々と答えるばかりで、自分から積極的に話しかけるといいう行為をあまりしていなかった。しかし、皇女殿下達はどうかやら活発な方が多いようで、アーニヤはよく腕を引かれていた。

そんな日々がアーニヤに変化をもたらしたのか、以前よりも笑顔を浮かべる事が多くなり、庭を駆け回るような少女へとなっていた。

ルルーシユもよく遊びに誘われるのだが、ルルーシユはとんでもなく体力が無いため、すぐに疲れて倒れ伏してしまい、その様子を笑われて、怒って追いかけるも、またすぐに倒れてしまうという負のスパイラルに陥ることも多く、その様子はアリエスの離宮を訪れる多くの大人や、ルルーシユとナナリーの実母「マリアンヌ」を笑顔にさせて

いた。

そんな日々が2年ほど続いたある日、アーニヤはいつもの様にアリエスの離宮を訪れ、ルルーシユやナナリーと一緒に遊ぼうと思った。しかし、どうも様子がおかしいことに気がついた。

違和感の正体はすぐに分かった。いつもは多いとまでは行かなくても、来客が途切れることなどなかった庭園や建物の中に人の姿どころか、人の気配すら感じられないのである。

アーニヤは困った。ルルーシユ達と遊ぶときに外で遊んだはあっても、ルルーシユ達と会うのは基本的にアリエスの離宮以外にあり得ず、それ以外にいそうな場所を知らないからだ。アーニヤは、言い寄れない不安を感じながら、一人でルルーシユとナナリーの姿を探して歩いた。ポツリと雨が降り出した。

1

時は少し遡り、ルルーシユの場面に移り変わる。場所はアリエスの離宮では無く、父である第98代ブリタニア皇帝「シャルル・ジ・ブリタニア」の住む王宮、さらにその中にある謁見の間にて、父と対面していた。

「…父上、なぜナナリーにあの様な厳しい言葉をおかけになられたのですか!? ナナリーは、一晩のうちに母を亡くし、歩行する術を失い、そして光すらも奪われたのです! それなのになぜ、あの子に優しい言葉をかけてあげないのですか!?!」

ルルーシユは、激怒していた。母が死んだのにもかかわらず、「そうか」という一言だけで済ませ、死に顔も確認せず、その上、ナナリーに向けて酷い言葉を投げつけたのだ! ナナリーはそれで無くてもまだ6歳の子供で、物事の道理も完全に理解したとは言えない年頃であり、昨晚にたくさんの大きなものを失ってしまったというのに!

ルルーシユは目の前の父である皇帝シャルルを厳しい目つきで睨みつけていた。シャルルは目を背けることなく、ルルーシユの言葉を聞いていたが、ルルーシユの言葉が止まったのを見ると、ルルーシユに言った。

「ナナリーがそこで立ち止まるなら、あやつはそこまでの人間だったということよ」  
「なっ!」

ルルーシユには、父のその言葉が信じられないものに感じた。この男は、いったい何を言っているんだらうかと。

ルルーシユは再び言い募ろうとしたが、目の前からの凄まじいプレッシャーに口を開けることが出来なかった。そうしているうちに、再びシャルルが口を開く。

「人間とはあ! 不平等においてこそ進化する生き物であるうう! 今のナナリーやお前の

様な状況になってこそ、真に人間とは進化するのだあ！つまり、貴様達がここで立ち止まるというのならば、それは怠惰というものよお！」

その言葉に、ルルーシユは絶句する他なかった。この男は、確かに強さを求めていた。しかし、これでは度がすぎている。ルルーシユが衝撃を受けていると、シャルルから一つの事実を告げられた。「日本へ向かえ」と。

1

ルルーシユは、気づいたらアリエスの離宮、その庭園にいた。ナナリーは王宮で治療を受けているが、それが終わり次第2人は日本へと連れていかれるだろう。政治のための駒として。

ルルーシユは悲しかった。母の命を守れなかったこと。ナナリーの心を守れなかったこと。そして、自身の尊厳すらも守れなかったこと。全てに対してルルーシユは絶望を覚えていた。

体にあたる雨はだんだん激しさを増し、体から急速に体温を奪っていく。もはや立っていることすらできず、その場に座り込むと、丸くなってしまった。その姿はまるでいじけた子供の様だが、その内面は荒れ狂う暴風の様であった。

ルルーシユは考えた。これまでのこと、これからのこと。そして、アーニヤのこと。彼女と初めて出会ってから、もう2年の付き合いになつていた。最近では行儀見習いとして、このアリエスの離宮に来ていたため、遊ぶ機会は以前ほど多くはなかつたが、それでも親しくしていた少女。その少女のことが頭をよぎる。

ルルーシユは女々しい考えだと自分自身を嗤つた。ルルーシユにこの感情はまだわからなかつたが、彼女のことを考えただけで、体が温かくなる様な氣になつた。

このまま、この暖かさに浸つていたい。ルルーシユは、もう半分も回つていない脳の片隅でそんなことを考えた。その時、目の前から声が聞こえた。最も聞きたかつた、1人の少女の声が。

1

アーニヤは焦つていた。アリエスの離宮の中を長い間探してみても、人どころか、ネズミの一匹すら見当たらない。探してない部分は庭園の隅だけになり、アーニヤは雨の中そこに向かつた。そして、見つけたのだ。びしょ濡れになりながら丸まる、1人の少年の姿を。

「ルルーシユ？」

「…」

「ルルーシユ！」

「…アーニヤか？どうして君がここに…」

「それはこつちのセリフ！こんなになつて、こんなところで何してるの!？」

アーニヤはルルーシユに厳しい口調で詰問した。ルルーシユはしばらく黙っていたが、アーニヤが声をかけ続けると、ポツリポツリと今までのことを話し始めた。

母が殺されたこと。ナナリーの目が見えなくなり、足も動かなくなつてしまつたこと。父に見捨てられたこと。そして、日本へと行くこと。

「…そう」

アーニヤは何も言えなかつた。もう大好きなルルーシユやナナリーには会えないかもしれない、マリアンヌにはもう2度と会えないのだと。しかし、今ばかりは己の悲しみではなく、ルルーシユの悲しみを優先した。

「ねえ、ルルーシユ」

「…なんだ」

「辛い時には泣いたつていいんだよ？」

ルルーシユは涙を流していなかつた。拳をきつく握りしめ、歯を食いしばり、自らの内から湧き上がる悔しさと必死に戦っていた。しかし、アーニヤの言葉を聞き、今まで

耐えてきた分が一気に放出された。

ルルーシユはみつともなくアーニヤの胸にしがみつき、大声で泣いた。恥ずかしさもあつた。しかし、それよりも悲しみが勝った。いくら頭がいいと言つても、ルルーシユもまだ9歳の少年。子供だった。

アーニヤは何も言わず、ただルルーシユの背中を撫で続けた。優しい手つきで、ずっと。

いつの間にか、空は晴れていた。

## 3話 別れ

ルルーシユは恥ずかしさのあまり、「穴があつたら入りたい」と切実に思いながら、アーニヤの方を向けなかった。理由は単純明快で、先程までルルーシユがアーニヤに慰められていたという事実、ルルーシユのプライドが大きなダメージを受けているのである。

妹と同じ年の年下の女の子に正面から抱きしめられ、背中をさすられていた！さらに、自分はその女の子の胸でみつともなく泣いてしまった！…ルルーシユの小さな自尊心は、傷つきっぱなしである。

しかし、先程の出来事によりルルーシユが救われたのも事実であり、ルルーシユがお礼を言おうとアーニヤの方を向いた瞬間、アーニヤと目があつた。ルルーシユは全力で顔を背けた！もう1度、恐る恐るアーニヤの方に顔を向けると、アーニヤの頬が赤く染まっていた。先程の出来事は、やった本人からしても恥ずかしいことだったようだ。

「アーニヤ！」「ルルーシユ！」

「むっ、先に良いぞ！」「…先に良いよ」

そして、2人とも目を見て話してはいないために、声が完全に重なってしまうというべ

々な展開が待っていた。ルルーシユは1つ咳払いをし、アーニヤの方を完全に向くと、未だ赤く染まる自分の頬を意識しつつも話を切り出した。

「…アーニヤ、まずは、俺の事を慰めてくれてありがとう」

「…私は当然の事をしただけ」

「それでも、俺はお前に救われた。お前だから、救われたんだ。ありがとう！」

ルルーシユは、今の純粋な気持ちを伝えることにした。どれだけ恥ずかしくとも、もうアーニヤとは2度と会うことはないかもしれないから…

アーニヤもルルーシユの真剣さを感じたようで、「分かった」と返事をする、今度は自分の番だと言わんばかりにルルーシユの顔を真つ直ぐ見つめた。

「ルルーシユ、日本に行くって、本当？」

「…ああ。今日、父上に言われたよ。」

「…もう、会えないの？」

「…そうかもしれない」

「そんなつ…私、嫌だよ。ルルーシユとも、ナナリーとも会えなくなるなんて！」

そう言つて、今度はアーニヤがその瞳に涙を浮かべていた。アーニヤも所詮は6歳の少女。大好きな相手が突然いなくなるなんて、泣かずにはいられなかつたのだろう。それを見たルルーシユは、思わず口を開いてしまった。それは、胸に宿った未だ覚めやら

ぬ、熱い衝動に身を任せてのものだったのかもしれない。しかし、このところのルルーシユの頭の中にあつたのは、「アーニヤを泣かせてはならない」という一つの思考だけだった。

「アーニヤ！約束をしよう！」

「…約束？」

「ああ！俺とお前で！」

「…どんな？」

「それはもちろん…!？」

ここまで言つてルルーシユは気づいた。自分が一体、アーニヤに向かつて一体何を言おうとしていたのかを。この時になって、ルルーシユはようやく自覚した。自分がアーニヤに恋してるといふことを。

しかし、この場で婚約の申し込みなど決してできるわけがなかった。なぜならば、ルルーシユはもはや廃摘されたも同然の身分であり、しかもこれから日本に行けば、もう一度生きて帰つてこれるかも怪しい。しかし、口に出した言葉の続きを言わないことなど、時間を巻き戻せでもない限り不可能なわけで、ルルーシユはとつさに別の言葉を口にしていた。

「アーニヤ、君は俺の騎士になるんだ！」

「…騎士？」

ルルーシユは内面で頭を全力で抑えていた。何言っただ俺のバカ！と自分自身を罵っていた。口に出した言葉を止められないのも事実。ここで何かを口にしなければルルーシユはアーニヤの涙を止めることはできなかっただろう。しかし、この「騎士になつてくれ」というのはどう考えてもおかしかった。

そもそも、男が女の騎士に守ってもらうなど、世間から見れば不甲斐ない以外の何者でもなく、また、この場面に適しているとも到底思えなかった。一方のアーニヤはポカソとしていたため、第1目的である「涙を止める」ことには成功していた。

「そうだ！お前は俺の騎士となるんだ！何年かかっても良い、必ず俺を迎えに来い！…そして、俺を守ってくれ。」

この言葉には、アーニヤと離れたくないというルルーシユの気持ちと、アーニヤに立派になつてほしいと願うルルーシユの気持ちの両方が込められていた。

騎士というのは、この国の中ではかなり高い地位に就くことができる職である。皇族の専属の騎士として仕えることができれば、それ相応の生活ができる。それに、皇帝直属の最強の騎士に与えられる「ナイト・オブ・ラウンズ」の称号を手にすることができる。その将来は順風満帆であると言つても過言ではない。

ルルーシユは、1度口に出した言葉が止まらないというならば、それを利用しようと

考えた。ルルーシユの考えではこの約束を交わした後、この言葉を励みに訓練を頑張るようになれば、高い実力をつけて本当に騎士になることができる。そうすれば、アーニヤは一人でも生きていける。そう思った。

「分かった！何年かけてでも、絶対にルルーシユのこと迎えに行くから！」

アーニヤはそう言つて屈託無く笑つた。ルルーシユの考える、裏の未来を考えもせず、ただ実直に、この約束を果たそうと考えた。アーニヤはこの後、凄まじい成長を遂げることになる。「ルルーシユの騎士になる」その約束を胸に抱いて。

1

ところで、この光景を影から眺めている一人の男がいた。その名を「ジェレミア・ゴツドバルト」といい、元々は「ヴィ」家を支援する名家の長男であった。

しかしこのジェレミア、実は先日の「マリアンヌ襲撃事件」で警護を担当していたものでもあり、職務を怠慢し、敬愛するマリアンヌを守れなかった罰として、自殺まで考えていた。そして、最後にアリエスの離宮を見ようと足を運び、この光景に遭遇したのだった。

ジェレミアは涙した。幼い少年と少女の、この世で最も尊ぶべき神聖なる誓いに。そ

して気づいた。2人が何も手にしていないことに。

本来、騎士の誓いというのは、自分の心臓に剣を向けた状態にして、忠義を果たすべき主君へと差し出す。それを主君が受け取り、左右の方に剣を乗せ、誓いの言葉を宣言するというものだった。しかし、今2人は剣どころか、棒切れ1つすら持つていなかった。

ジェレミアは迷った。この神聖なる誓いを邪魔してでも、剣を貸し出し、より忠義に對する思いを厚くするべきか。はたまた、この光景をすぐに入るであろう自らの墓まで持つていくのか。

その時、ジェレミアは少年がルルーシユだということに気づいた。ジェレミアはその時、確かに感じた。この少年に忠義を果たすことこそが我が使命なのだ。であれば、ジェレミアに迷いはなかった。

1

「ルルーシユ様。失礼ながら、進言させていただきたいのですが、よろしいでしょうか？」

ルルーシユはとっさに声のした方を向いた。するとそこには、長身の男が傳いてい

た。ルルーシユは、その声に聞き覚えがあつた。よくアリエスの離宮に来て、母と話をしていた人物だと気づいた。

「ジエレミア・ゴツドバルトか？」

「はっ！」

「進言とは一体どういうことだ」

ルルーシユは多少怒気を含ませながら言った。自分とアーニヤがせつかく(?) 良い雰囲気だったのに、急に出てきた男に壊されたからだ。しかし、このタイミングで出てくるとは、何かあるに違いないと考えたルルーシユは、とりあえずその「進言」とやらを聞くことにした。

「恐れながら、御二方は神聖なる騎士の誓いをしてらっしゃるにもかかわらず、剣をお持ちでないご様子。しからば、我が剣にて、その儀を完遂させて欲しいと思ひ、参りました」

「ほう、気がきくではないか」

ルルーシユは機嫌が良くなった。いくら仮初めであると言つても、本格的なものであるほど、アーニヤの取り組みも一生懸命になるだろうと考えたからだ。

「アーニヤ」

「…うん」

ジェレミアがやり方を2人に教え、それになぞらえてルルーシュとアーニヤの叙勲式が始まった。

その誓いの様子はまさしく皇帝と騎士の関係のようであったという。

1

飛行場にて、ルルーシュはナナリーを背負って歩いてきた。その先には、日本へ向かう飛行機がある。これに乗ってしまえば、おそらくアーニヤとは会えなくなるだろう。と思った。涙はあの日、あの庭園で出し切ったと思つていたのに、目からは涙が溢れ出そう。ルルーシュは思わず空を見上げた。

飛行場には、他の皇族たちの姿もある。泣いているものも、無関心なもの

もいた。挨拶もそこそこに、ルルーシュは飛行機になろうとした。その時、この場所で聞こえるはずのない声が聞こえた。

「ルルーシュ！」

アーニヤだった。警備員の制止を振り切つてルルーシュの元へと駆けてきたアーニヤは、ルルーシュの目の前で止まると

「絶対に迎えにいくから！」

と言った。

「ああ、待ってるよ」

ルルーシユはそう返すと、そのあとは黙って飛行機に乗った。涙はもう、止まっていた。

1

アーニヤは、ルルーシユの飛行機を見送った後、ジェレミアのもとに身を寄せることにした。忠義とは何か、騎士とは何かを知るためだ。それに、実家では元々皇子と仲がいいという理由で優遇されてきたが、その皇子はもういない。実家でどんな扱いを受けられるなんて想像もつかないが、少なくともろくなことにはならないだろうと思った。

アーニヤが考え事をしながら歩いていると、不意に懐かしい雰囲気を感じたような気がした。アーニヤは気のせいかと頭を振り、自分にできることを精一杯することにした。

「…頑張ってるね♪」

そんな誰かの呟きは、喧騒の中に溶け込んで、浮かんでくることはもうなかった。

### 3話までの設定、補足

いつもご愛読ありがとうございます！

まずは、評価バーが赤色になったことについてお礼を言わせてください。ありがとうございます！読者の皆さんの評価が直接私のモチベーションにもつながりますので、ぜひ皆さんの思った通りの評価、感想をしてくれると嬉しいです。

さて、今回は、本編ではなく設定編ということですが、説明の必要があると感じた場合には実行していこうと思います。また、これによる投稿の乱れは極力ないようにするつもりです。

・アーニヤの設定について

3話の最後を見てお気付きの方は多いかと思いますが、ここで明記させていたかと、感想にもあった「アーニヤにマリアンヌが憑依している」という原作の設定は外させていただきました。

理由としては、アーニヤにマリアンヌが憑依していた場合に起こる記憶の喪失や、そ

れによるアーニャの内向的性格への変化が私の書きたい物語には合っていないものだと考えたからです。また、早い段階で原作との大きな違いが出てしまいましたが、ここからどう言った物語をルルーシュやアーニャ、そして他の人物たちが紡いでいくのか、ぜひとも楽しみにしてもらえると嬉しいですね。

原作との違いをプラスのものとして捉えながら、この作品「悪逆皇帝と騎士」を楽しんでいただけると幸いです。

#### ・章タイトルについて

1話から3話まで投稿させていただきました今作ですが、章タイトルは「原作開始10年前」となっています。

コードギアスの原作アニメは、ルルーシュが高校2年生、17歳の時に始まります。その8年前からルルーシュは日本にいたことがアニメでは明らかになっていたので、アーニャとの関わりを持たせるにはもう少し早いほうがいいと思います、「10年前」という年代を初めに使わせていただきました。

原作10年前の話は実際には1話と2話の最初だけで、2話の途中からは8年前へと変わっています。この原作開始前編は後に2、3話で終了し、原作に入っていくように思

うので、楽しみにしていてくれると嬉しいです。

・各種キャラクターの設定

各種キャラクターの設定について、大きく変えたところはアーニヤとマリアンヌに関してだけで、後のキャラクターについてはほとんどいじっていません。そもそも、今まで出てきた主要のキャラクターが少ないということもあります…

また、唐突に出てきたジェレミアに関して、私は「幼少期編でルルーシユたちとの関係を作るにはここしかない!」と思い登場させました。彼は、アニメをご覧になった方ならわかる通り忠義の男です。しかし、彼の忠義はR2の途中からしか発揮されません。私は彼の忠義をもっと尽くして欲しいと思い、ルルーシユとアーニヤの2人に幼いうちから関わらせることで、彼の忠義をより物語に絡ませていこうと思いました。

また、マリアンヌはアーニヤに憑依していませんが、その魂は生きています。しかし、本編に彼女が関わってくることはしばらくないだろうと思います。原作程度の絡みはもちろんしていくつもりです。

・最後に

この作品は、まだ始まったばかりで、作者である私も大まかなプロットがあるにしろ、どのような物語になるのか想像がつかない部分もあります。しかし、そう言った箇所も読者の皆さんと一緒にこの作品を盛り上げ、楽しんでいけたらいいと思います。これからも「悪逆皇帝と騎士」をよろしくお願いします！

次話から日本編に入り、あのキャラクターも登場します！ぜひお楽しみに！

## 4話 最悪の出会い方

ルルーシユは、舗装のあまりされていない道を、ナナリーを背負いながら歩いてきた。太陽に体を照らされ、汗が滝のように流れ落ちる。何度も休憩を挟んだため足取りはしつかりとしているが、ルルーシユ自身の意識はもはや朦朧としている。ルルーシユを歩かせているのは「背中にナナリーを背負っている」という事実だけだった。

しかし、ルルーシユが命を張るには、そのたった1つの事実だけで十分だった。なぜなら、ルルーシユには、もうナナリーしか残されていないのだから。

1

「お兄さま、大丈夫ですか？私、重くありませんか？」

「ああ、大丈夫だよナナリー」

「でも、お兄さまは体調が良くないようですが…」

「心配ないよ。それに、あとはここを登ればすぐに着くからね」

ルルーシユがナナリーのことを気遣いながらゆっくりと歩いてきてからどれほどの

時間が経ったのだろうか。ようやく目の前に、目的地の目印である長い石畳の階段が姿を現した。

階段には等間隔で鳥居が並んでおり、先が見えないほど長い。何度も休憩を挟み、ときには諦めそうになりながらも、それでも諦めることなく、1歩1歩を踏みしめながら、ルルーシユはゆつくりと階段を上っていく。そうして、階段を上った先で待っていたのは現日本国首相「枢木ゲンブ」その人だった。彼は、ルルーシユとナナリーを一瞥すると、

「疲れただろう。家の中に入りなさい。少し休憩したあと、君たちが今日から住むことになる場所に案内しよう。」

そう言つて、建物の中へと入つていった。お礼を言う間もなかつたが、ルルーシユは言葉に甘えて、家の中に入ることにした。

家は木造の、落ち着く感じのする家で、大理石を使った宮殿に住んでいたルルーシユからすればそれまでの自分の常識がひっくり返されるほどの衝撃を受けた。

休憩中には、ナナリーがルルーシユに、家の様子や、家の中に何かがあるかなどを聞き、ルルーシユがそれを詳しくナナリーに伝えていく。2人のやりとりを見ていたゲンブは、微笑ましいものでも見たかのように笑ったあと、何かを耐えるような悲痛な顔をして、「君たちの住む場所へ案内しよう」といった。ルルーシユはナナリーをおぶさると、

ゲンブの後をついていった。

1

「…すまないね。この日本には、君たちブリタニア人のことを良く思っていない者がたくさんいるんだ。その者たちを納得させるために、君たちにはここに住んでもらうほかなかった」

そういつてゲンブがルルーシユたちを連れてきたのは、土倉の前だった。相当年季が入っているのだろう。しかし、中は意外にも綺麗で、ルルーシユは驚いたが、「流石に、皇族の方を埃まみれの場所に住ませておくわけにはいかないよ」と言つて、その場を立ち去つた。

「お兄さま、私たちが今から住むのはどんな場所なんですか？」

「素敵などころだよ。さつき見た枢木の本家に負けないくらい立派だね」

ルルーシユは、例え嘘をつくことになつても、ナナリーを悲しませることなどできなかつた。しかし、そんなルルーシユの考えをぶち壊すかのように、大きな声が響いた。

「お前ら、ブリタニア人だな！ 僕の基地で何してるんだ！」

それは、ルルーシユと年齢が変わらないように見える少年だった。栗色の髪は風を受

けてなびいており、育ちがいいことを思い浮かべさせる。さらにルルーシユは、そこに先ほど見た枢木ゲンブの面影があるのを感じ取った。

「枢木ゲンブの息子、枢木スザクだな？」

「そうだ！」

「ここが貴様の基地だと？」

「そうだ！ここは僕の基地なんだ！それに、本家の作りと変わらないなんて、馬鹿にしてるのか!？」

「…ッ。貴様！言わせておけば！」

ルルーシユは怒っていた。この日本に来ることが決まった時から、ずっと怒りをその内面に孕んでいた。しかし、我慢してきた。自分は外交のための道具なのだ。それも、限界だった。そして何より、ナナリーを悲しませるような真似をしたこの少年「枢木スザク」を許しておけはしなかった。

ルルーシユはスザクに飛びかかった。ルルーシユには勝てると思う自信があった。なぜなら、いきなりこちらに絡んできた蛮人に負けるはずなどないと思ったからだ。しかし、その思い込みはすぐに幻想となった。

ルルーシユが飛びかかってくると、スザクはその身体を捻ってルルーシユを交わし、地面に転がったルルーシユの上に馬乗りになると、その顔目掛けて拳を振り抜いた。

「バシッ！」という大きな音が1度響いた。もう1度殴ろうと、スザクが拳を振り上げた瞬間、その場所に悲痛な声が鳴り響いた。

「もうやめてください！」

スザクは、驚いて拳を途中で止めた。ルルーシユもまた、殴られた痛みなど無いように、驚いた顔をしてナナリーの方を向いた。

「私たちは、枢木首相にこの場所に住むようにと言われたんです！あなたの居場所を奪ってしまうのは申し訳なく思っています！しかし、私たちも生きるために必死なので、す！どうか、ここは引いて頂けませんか!?!」

ルルーシユはさらに驚いた。今までナナリーが大声で何かを懇願する様子など見たことがなかった。まして、目と足が不自由になつてから、内向的な性格になつてしまい、以前のような活発な言動も鳴りを潜めていたため、驚くのは当然のことだった。

それは、スザクも同じようであつたが、その驚きのベクトルはルルーシユとは違つていた。

「君…目が？それに足も…」

スザクが驚いたのは、ナナリーの姿だった。閉じた目、そして身じろぎひとつしない足。スザクは、その様子に同情を覚えた。

「ッ…今日は、もう帰る」

そうやって、スザクは家のある方へと足を進めていった。その足取りは重さを感じさせるものであった。

2人の出会いは、互いに傷跡を残す、最悪のものとなったのだった。

## 5話 決意

ルルーシユとスザクが土倉の前で喧嘩をした日から数日、2人の関係に変化が見られ  
た。

「あの時は、ごめん」

スザクが土倉に来て、ルルーシユに謝ったのである。スザクは喧嘩をしてからこの日  
まで、ルルーシユとナナリーの生活を覗き見ていた。そして、ルルーシユがナナリーを  
愛していることや、置かれた環境の厳しさを知った。そして、その観察の過程で、自分  
がいかにか恵まれていたかを知った。

スザクはあの日の自分を殴り倒したくなった。あの日のスザクは、相手がブリタニア  
人だということを理由の大半にして、相手の言い分も聞かずに、ルルーシユを深く傷つ  
けてしまった。それは、スザクが持つ正義の心が許さなかった。

過ぎてしまった時は元には戻せない。それでもスザクは、あの出会いのやり直しがし  
たい。もう一度ルルーシユと話がしたい。そんな気持ちを持って土倉を訪れたのだっ  
た。

ルルーシユは困惑していた。喧嘩をした当日には、枢木ゲンブが謝罪を口にし、スザクのことにも叱っておくと言っていたが、結局その日からスザクに関しての音沙汰が何もなかったため、いきなり謝られても困るだけであった。

ルルーシユが返事に戸惑っていると、ナナリーがルルーシユに向かって笑いかけた。

「お兄さま、あの人もああ言っておりますし、許してあげてはいかがでしょうか？」

「ナナリー……」

ルルーシユにも言い分はある。ルルーシユがあの日怒ったのは、ナナリーの為とはいえ、ルルーシユがナナリーに嘘をついたことを知られてしまったからである。そして、ナナリーを深く悲しませることになってしまったからである。

しかし、目の前で本気で謝っている様子を見せられてしまったては怒るに怒れなかったし、何よりナナリーが良いと言っているのだ。ルルーシユに申し出を断る選択肢はもはや存在しなかった。

「ああ、俺はお前のことを許そう。だが、お前も俺のことを許してくれないか？俺はあの日、カツとなったとはいえ、お前に掴みかかってしまった。お前には反撃されてしまったが、その行為自体を俺は詫びよう」

「そんな！君が謝ることなんて……。いや、良いよ、許してあげるよ」

「ふふつ、じゃあ、仲直りの印に握手ですね。それに、ちゃんと自己紹介もしないと！」  
そうして、2人の間に起きた喧嘩は終わりを迎えた。そうして2人は、最悪の出会いから一転して、お互いを支え合うことのできる親友となつていくのであった。

1

ルルーシュが日本に来てからそれなりの時間が経過していた。スザクとの関係は良好になり、今では親友と呼ぶのも恥ずかしくないほどの関係になつていた。そうして、ルルーシュがこれからの生活に希望を見出していたその時、ルルーシュ達に信じられない報告が届いた。即ち、「ブリタニア帝国が、日本に向けて宣戦布告をした」と……

1

「くそッ！」

ルルーシュは怒つていた。自分の父、シャルル・ジ・ブリタニアに対し、純粹な怒りを覚えた。自分とナナリーを人質として日本に送り込んでおきながら、その日本を攻

め、ナナリーを危険にさらすことなど、ルルーシユに許しておけるはずがなかった。

ルルーシユは、その知らせを聞いてすぐに逃げ出す準備を始めた。と言つても、その身一つ同然で国から追い出されたルルーシユとナナリーの荷物など少ししかなかった為、準備自体はすぐに終わった。

ルルーシユは、スザクに逃げることを知らせるか悩んだ。しかし、一緒にいるところが、両軍のどちらに見つかつてしまつても、ロクなことにはならない事は目に見えていた。ルルーシユとスザクの、ブリタニア帝国第11皇子と日本国現首相の息子の友情関係はここで断ち切つてしまわねばならない。そう思つたルルーシユは、スザクに何も伝えないことを選んだ。

ルルーシユはスザクに伝えない道を選んだ。今から会うにも、見つかるリスクが高すぎる。そう判断しての判断だった。

「ルルーシユー」

しかし、逃げ始めてから少し経つた後、スザクはルルーシユに追いついた。元々、ルルーシユは体力が無く、それにナナリーをおぶっている為、こまめな休憩が必要で、時間をかけても進める距離は僅かであった。一方のスザクは、元々運動が得意であり、ルルーシユとは親友とも呼べるほどの仲だった。つまり、スザクにはルルーシユがどこにいるかがおよそではあつたが分かつたから、追跡も可能だったのである。

スザクがルルーシユ達に追いついた時、ルルーシユ達は休憩をしていた。スザクは、体の火照りに身を任せ、声を荒げてルルーシユに怒りをぶつけた。

「どうして僕に何も言わずに逃げるんだ！僕たちは、親友じゃなかったのか!？」

「ツ！親友だからこそ！俺たちは一緒にいるべきではないんだ！」

スザクがルルーシユに向かって大きな声を上げると、休憩していたルルーシユも立ち上がり、それに負けないような大声を張り上げた。ルルーシユには、ここで声をだしてしまえば、ブリタニア人に攻撃的な日本人に見つかる危険があることなどわかりきっていた。しかし、どうしても感情の高鳴りを抑えることができなかった。

ルルーシユは、スザクに説明した。ブリタニアが日本に攻め込んで来れば、ルルーシユとナナリーはブリタニアに捕まってしまう、そのまま殺されて、侵略の合法的な理由とされてしまうだろうと。そして、現首相の息子であるスザクがその場にいれば一緒に殺されてしまう。そうなるのはごめんだと。

スザクは、理解はしても納得できなかった。こんなお別れの仕方なんて嫌だと思つた。しかし、上空を日本軍の戦闘機が飛んでいるのを見ると、もう時間がないことを嫌でも思い知らされて、スザクは悲しくなった。

「ルルーシユ、僕は……！」

「……スザク、ここでお別れだ」

スザクとルルーシユは顔を合わせた。2人とも泣いていた。雲ひとつない青空がどこまでも広がっているのに、雲の代わりには戦闘機が飛んでいる。

世界は、理不尽だ。ルルーシユにとってはいつだってそうだった。スザクは、初めてそう感じた。

「俺は、このままナナリーと一緒に逃げる。スザク、お前は家に戻って、俺の代わりに枢木首相に今までのお礼を言ってくれ。恩を仇で返すようなことになってしまったが、それでも礼を言いたいとな」

「…ああ、分かった。…元気で、ルルーシユ」

「お前もな、スザク」

また会おう。その言葉は、互いに口にしなかった。2人は、別々の道に進み始めた。もう、涙は止まっていた。

1

スザクは、ルルーシユと別れてすぐに元来た道を引き返すと、父親である枢木ゲンブがいる家に駆け込んだ。幸い、今日は父は仕事は無く、家にいるからだった。

「父さん！」

スザクにとって、父というのは、母の分も愛情を注いでくれる素晴らしい人だった。自分のためにしてくれることは少なかったが、それでも愛してくれているというのは感じていたし、何より、国のために頑張っている父の背中が、とてもカッコよく見えて、将来自分も「誰かのため」に行動できる人間になりたいと思っていた。

「…スザクか」

ゲンブは、部屋の畳の上で瞑想をしていた。スザクが飛び込んでくると、その姿を確認した後、また瞑想を始めた。

その姿を見て、スザクは息を整えると、神妙な面持ちでゲンブの対面に座って、言葉を紡いだ。

「ルルーシユとナナリーは、もう逃げたみたいだ。恩を仇で返すような真似をして申し訳ないって。それに、今までのお礼も…」

「そうか」

「父さんも、早く逃げよう。もうすぐここも戦場になる。それに、父さんがもしブリタニア軍に捕まってしまったら、間違いないく殺されちゃう！」

「私は戦う。お前は一人で逃げるんだ」

スザクは耳を疑った。父が今なんと云ったのか咄嗟に信じることができなかった。

「父さん、何言って…」

「いいか、よく聞け、スザク。私は、お前のことはもちろん、ルルーシユとナナリーのことも、自分の子供のように思っていた。だが、ブリタニア帝国のことは許しておけないのだ。なぜなら、奴らは子供の命をなんとも思っていないからだ。子供とは、守るべきものだ。それが自分の子供ならば尚更。しかし、ブリタニア皇帝は、その責務を放棄した。私にはそれがどうしても許せない。」

「でもー」

「すまないな、スザク。これは、私のわがままなのかもしれない。だが、奴らに国を明け渡してしまえば、この国はきつと不幸になる。子供たちが笑えない世界になってしまう。そんな明日を、私は許せない。だから、お前たちを守るために、私は戦うよ」

ゲンブは、スザクを見つめた。スザクは、その目にある父の強い意志を感じ取った。もはや、説得は不可能だった。

「分かった。…父さん、死なないで」

「もう行きなさい。ここでお別れだ」

スザクは、その場を去った。涙は止まっただはずなのに、もう涙が出てきた。

数日後、父の部下に連れられて避難した先で、父が自害したことを知った。父は、優しい人だった。それ故に、失う今日と、守るべき明日の重圧に耐えきることができなかつたのだらうと、スザクは思った。

日本軍はその後も抵抗を見せたものの、最終的にはブリタニアに降伏し、日本という国は地図上から消えた。日本には、エリアーという名が与えられ、日本人はイレブンと呼ばれるようになった。

スザクは決意した。父の意志を継いで、子供たちが笑えるような明日を作ろうと。その為に、力をつけようと思った。血を流すことなく世界を変える、そんなことを目標にして。

「コードギアス 反逆のルルーシュ」編  
6話 平穩の崩れ

薄暗いバーの店内。2人の男が机を挟んで向かい合って座っている。1人は貴族の男であり、余裕の表情で爪とぎをしている。一方、向かい合うのはこのバーの主人らしき男で、冷や汗を流しながら机に向かっている。机の上にはチェス盤とチェスクロックがあり、片方のチェスクロックの残り時間だけが刻一刻と減っていく。バーの主人が諦めかけたその時、バーの扉が大きく開き、そこに光が差し込んだ。

「やっと来てくれたのか！」

バーの主人が心底安堵したかのような表情で、今しがた入ってきた青年に声をかけた。

「状況はかなり悪いようですね」

「ああ……。だが、君なら勝てるだろう……？」

「ええ、任せてください。報酬はいつもの所へ」

青年は、バーの主人との会話を終えると、先程までバーの主人が座っていた場所に腰掛けた。盤面はもう負けといつてもいいほどに壊滅的であった。青年が席に着いた途

端、その青年がキングの駒を取るのを見て、貴族の男は青年を嘲笑うかのような口調で話しかけた。

「貴様、キングから動くだど？」

「王が動かないと、民はついてこないからな」

そうして青年は、キングの駒を動かした。

1

「ルルーシユ！今の試合8分37秒だつて！今までの最短記録更新だな！」

「相手が弱かったただだよ。貴族なんて、権力を傘にした無能なのさ」

今しがたまで、チエスを打っていた青年に話しかける者の名は「リヴァル」。彼は「アツシュフォード学園」に通うブリタニア人の学生であり、学生服を身にまといつてゐる。

であれば、先程までチエスを打っていた青年もまた学生であることがわかるだろう。彼の名は「ルルーシユ・ランペルージ」。かつて、「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア」として生きていた少年、その成長した姿であつた。

ルルーシユとリヴァルは、昼休みに学校を抜け出してチェスの代打ちに来ていた為、急いで学校に戻る必要があった。リヴァルの運転するバイクのサイドカーに乗ろうとしたその時、ビルの壁面に設置されていた大型テレビの映像が突然切り替わり、1人の男が姿を現した。

男の名は「クロヴィス・ラ・ブリタニア」。ブリタニア帝国第3皇子であり、ルルーシユの腹違いの兄。そして、現在の「エリアー」総督であった。

クロヴィスは悲痛そうな表情を見せると、その口を開いた。曰く、「先日、「イレブン」の反乱によって失われた8名の命に追悼の意を」ということだった。

ルルーシユは、その姿を忌々しげに睨むと、リヴァルを促してバイクを発進させた。

1

ルルーシユとリヴァルが学校に向かう途中、高速道路を走っていると、後ろから大型のトラックが迫ってきた。明らかに法的速度を無視した速度での運転であり、このまま進めば、ルルーシユとリヴァルの乗るバイクなど原型を止めることなく潰されてしまう

であろうことが目に見えていた。

「おいおい！これはヤバイって！」

リヴァルは必死に速度を上げて追いつかれないようにするが、小型のバイクと大型のトラックでは馬力が違う為、その差は縮まっていく一方だった。

ルルーシユは考え事をしていた為、リヴァルの焦った声を聞き、現在の状況を把握したが、今のルルーシユにできるのは、バイクとトラックがぶつからないように祈る事だけだった。

道路が分岐に差し掛かった時、トラックはリヴァルのバイクを避けるように、立ち入り禁止の道路へと進んでいき、そのまま壁に当たって動きを止めてしまった。その音を聞きつけてか、周りには多くの野次馬が集まって来ていたが、誰一人としてトラックの運転手を助けようとする者はなく、それどころかその様子を携帯で撮るなどして、事故そのものを面白おかしく見ている者もいた。

「誰もトラックの運転手を助けようとする奴はいないのか……！」

ルルーシユは悪態一つつくと、何かを訴えるリヴァルの声を無視して、トラックに駆け寄った。そして、トラックに手を触れた瞬間、誰かの声のようなものを聞いた気がした。

「中の人、大丈夫ですか！」

ルルーシユが必死に呼びかけるが、トラックの運転席からは返事がなく、ルルーシユはどうにかして運転席に行けないかと、トラックの荷台の部分に乗り込んだ。そしてその瞬間、突然トラックがバックをし、凄まじいスピードで再び走り出した。ルルーシユの制止を求める声も虚しく、トラックはそのまま何処へと走り出してしまった。

1

一方その頃、クロヴィスは会見を終え、パーティーへと戻っていた。周りの貴族たちがクロヴィスのことを賞賛している時、1人の小太りした男がクロヴィスの元へ走り寄って来た。男がクロヴィスの耳に何事かを囁くと、クロヴィスは焦ったかのように男に向かって声を荒げた。

「何?」アレ」を載せたトラックが、テロリストどもに盗まれただど!」

「はい、そのように…」

「警察への説明はどうなっている!」

「それが、”アレ”の中身を民間人に知られるわけにはいかず…」

「ツ!もういい!親衛隊を出せ!」

「しかし、今このエリアーには「ラウンズ」の方が…」

「あんな、小娘、など放つておけ！本国への説明は後からどうとでもできる！」  
クロヴィスはそう言い放つと、管制室へと足を急いだ。

1

舞台は再びルルーシユへと移り変わる。トラックで運ばれている間、ルルーシユは考えを巡らせていた。先程、トラックの運転席の方から、1人の女がKMFに乗ってトラックの荷台から降りていったのを見て、ルルーシユは、このトラックがテロリストのものであることを知った。何故なら、このKMF、通称「ナイトメア」は、ブリタニア軍を除けば、エリアーの反ブリタニア勢力しか保有していないものであるからだ。

外からは、明らかに車ではないものの駆動音まで聞こえて来て、先程は銃声も響いた。その際にトラックが揺れたことから、このトラックには何かある。そう考えたルルーシユは、トラックの中を自身の携帯で照らした。今まで気付かなかったが、ルルーシユがあるトラックの荷台には、大きな丸い機械のようなものが積み込まれていた。

ルルーシユが、その球体について考えをめぐらそうとした時、トラックに大きな衝撃が走ったかと思うと、トラックはその動きを停止させた。

衝撃のせいだろうか、トラックの荷台の側面が開いた。その時、向こう側の通路から

1人のブリタニア軍の軍人が姿を現した。その軍人はフルフェイスのヘルメットを装着しており、暗闇の中でも活動できるようだった。その軍人は、ルルーシユの乗るトラックの荷台の中に入り、隠れているルルーシユを見つけると、ルルーシユに向けて蹴りを放った。

咄嗟の判断でその蹴りを腕で防ぐことに成功したルルーシユだったが、衝撃までも防ぐことはできなかつたようで、ルルーシユの身体は宙を舞った。

「もうこれ以上罪を重ねるな！」

軍人はルルーシユに向けてそう言った。

「罪を重ねるなだど？そもそも、最初に罪を犯したのはブリタニアではないのか！」

ルルーシユは蹴り飛ばされた状態から立ち上がると、暗闇からその姿を晒しながら軍人に向けて声を荒げた。すると、その姿を見た軍人は何かに驚いたかのように動きを止めると、フルフェイスのヘルメットを外しながらルルーシユに向けて話しかけた。

「ルルーシユかい？良かった、無事だったんだね！」

「お前…スザクか!？」

それは、7年前に別れたルルーシユの親友、枢木スザクだった。

こうして、2人が再会したところから、新たな物語の幕が開くのだった。

「…様、どうやらクロヴィス殿下が何やら始められるようですが…」

「…私は何も言われてない。それに、何かあればジエミアがなんとかするはず」  
ルルーシュたちとは別のところでも、物語は動こうとしていた…

## 7話 王の力

ルルーシユとスザクの再会。それは、2人にとって大きな意味を持っていた。

スザクには、7年前に別れてから安否がわからなくなっていた親友と再会できたことを純粹に喜ぶ気持ちがあった。しかし、ルルーシユには別の気持ちも存在していた。即ち、日本人であったスザクがブリタニアの軍人としてこの場所にいることに驚愕する気持ちであった。

「お前：ブリタニア軍に入ったのか」

「ああ、僕の理想を叶えるために」

ルルーシユの問いに、スザクは「理想」と答えた。それについてルルーシユが聞こうとすると、先にスザクが口を開いた。

「ルルーシユ、ところで君はこんなところで何を？まさか君がテロリスト：」

「違う！俺は巻き込まれただけだ！テロリストとは何の関係もない！」

「そうか、良かった。」

スザクは、安堵した表情を見せると、すぐに顔を引き締めて、トラックの荷台に積んであった球状の物体に指をさしてこう言った。

「それよりも、早くここから離れないと！ここは危険だ！その中には、テロリストが軍から奪った猛毒のガスが入っているんだ！」

スザクの言葉を聞いたルルーシユは、スザクに聞きたいことよりも自身の安全を優先し、スザクと一緒にその場を離れようとした。ちょうどその時、スザクが「毒ガス」と言っていた球体が開かれた。

スザクは自身の被っていたマスクをルルーシユの顔に押し付けると、そのままルルーシユと一緒にトラックの荷台の床に倒れこんだ。ルルーシユはスザクの咄嗟の行動に反応しきることができず、受け身も取れていないようであった。痛みには耐えながら顔を上げようとすると、その上には目を見開くスザクの顔が見えた。

「おい、スザク。一体何が……」

そして、ルルーシユもその光景を見て驚きを隠せなかった。球体の中から出てきたのは毒ガスなどではなく、拘束服で全身を固定された、緑の髪の女だった。

1

「おい、答えろよスザク！これが毒ガスか!?!」

「違う！僕は本当に毒ガスと！」

ルルーシユとスザクは、女をトラックの荷台から降ろし、拘束服の点検をしながらこの女について話をしていった。ルルーシユがスザクに事の真意を問いただそうとしたその時、先程スザクがやってきた通路から、小規模な歩兵部隊が現れた。スザクはその部隊の先頭にいた男に近づくと、その男に向けて敬礼をした。どうやら、スザクよりも上の階級の者らしかった。

その男は、軍服の内側から出した自身の銃をスザクに手渡すと、ルルーシユに聞こえるほどの声でスザクに命令した。

「枢木一等兵、こいつであのブリタニア人の学生を殺せ」

「そんな！彼は違います！テロリストではありません！」

「ならん！君がその手で殺すのだ」

ルルーシユにとって、スザクに銃が渡されようとしている時間は、地獄のように感じられた。親友の手で、何も残せないまま殺されてしまう。そんな最悪の未来を想像してしまい、ルルーシユはスザクの事を直視することができなかつた。しかし、次のスザクの一言にルルーシユは驚き、スザクへと顔を向けた。

「僕には、民間人を打つことなどできません。それに彼は友達で……」

スザクの答えに、ルルーシユが安堵した一瞬の後、スザクの上官とみられる男はスザクに渡そうとしていた銃を自分の手で構え直すと、

「では君が先に死ね」

と、スザクの脇腹を銃で撃った。

「スザアアアク！」

その光景を見たルルーシユは思わず叫ぶが、スザクを撃った男はそのまま銃をルルーシユの方へと向けた。銃の引き金に指がかけられ、ルルーシユが思わず目を背けたまさにその時、突然トラックが爆発した。ルルーシユは、その混乱に乗じて、女を引きずるようにして、地下道の中を走っていったのだった。

1

「クロヴィス殿下、親衛隊から報告が」

「内容は」

「それが、テロリストを逃してしまったとのこと、これから搜索をするようです」

「そうか…」

テロリストに関する報告を聞き、クロヴィスは何か思案するような顔になると、近くに控えていたバトレーに現在の状況を聞いた。

「バトレー！地上に出ているテロリストの活動状況は！」

「新宿ゲットーにて、未だに反乱を続けているとのことです」

「軍からアレを盗み出したテロリストどもが逃げた場所も新宿ゲットーだったな……」

そういつてクロヴィスは少しした後、立ち上がってこう命令を下した。即ち、「新宿ゲットーを壊滅せよ!」と。

1

ルルーシユは、トラックの爆発に乗じて新宿ゲットーの地下道を歩いてきた。幸いにも後ろからあつたが来る気配はなかったが、ルルーシユは急いで逃げていた。元々の体力のなさが災いし、しかも女を引きずらようにしながら逃げてきたため、もうルルーシユの体力も限界に近かった。

ルルーシユは女を投げるようにして放ると、壁に寄りかからながらも女に向かって怒鳴り声をあげた。

「二体お前は何なんだ! お前のせいで…俺は…スザクまでも…!」

しかし、1度怒鳴ったことで逆に冷静になったのか、ルルーシユは再び女を立たせると、また地下道を歩き始めた。

そうして進んでいくと、目の前に階段が見えた。ルルーシユは階段の陰に身を潜める

と、少し頭を出して周囲の様子を確認した。するとその時、正面から光が差し込んだかと思うと、辺りに銃声が鳴り響いた。

ルルーシユは突然の出来事に驚いたが、女の頭を下げさせると、自分もすぐに頭を階段に隠して銃声が止むのを待った。

銃声が止んだ後、再びルルーシユが階段から頭を出して、銃声の発生源を覗き見ると、そこにいたのは先程スザクを撃った男と、その男が率いる部隊だった。さらにその周囲を見渡せば、イレブンとみられる死体がそこかしこに転がっており、先程の銃声の犠牲者であるのだと知った。

すると、どこからか赤ん坊の泣く声が聞こえた。その声のする方をルルーシユが見ようとした時、それよりも早く銃声が鳴り響き、赤ん坊の声が聞こえなくなった。ルルーシユが別のルートからの脱出を試みようとしたその時、ルルーシユのポケットから携帯の着信音が鳴り響いた。

1

ルルーシユは、階段に隠れていたところを発見され、階段から引きずり出されていた。ここはどこかの倉庫らしく、床には先程撃たれたイレブンの死体が転がっている。この

先の自分の未来を想像したルルーシユは、自らの運命を強く呪った。

（俺はここで終わるのか……何もすることができず、こんなところで……！ごめん！ナナリー！）

ルルーシユが死を予見し、銃弾がルルーシユに向けて放たれた瞬間、それまで兵士たちに捕らえられ、抵抗を続けていた女が勢いよくルルーシユの前に飛び出してきたかと思うと、

「殺すな！」

と言いながら両腕を広げ、ルルーシユを守るかのような体勢になった。しかし、その叫びも虚しく、放たれた弾丸は女の額をまっすぐ打ち抜き、女はそのまま地に倒れ伏してしまった。

ルルーシユ自身もまた、目の前で人が死んだということに驚き、思わず膝を地面についてしまった。ルルーシユの心は折れ、もう立ち上がることをさえないようだった。

スザクを撃った男が他の兵士たちに命令を下し、再び銃の照準がルルーシユへと向けられた瞬間、突然、先程額を穿たれ死んだと思われる女の手が動き、ルルーシユの手首に触れた。次の瞬間、ルルーシユの意識は今ある場所を離れ、別の場所へと移ったのだった。

「力が欲しいか？ならば、契約をしてもらう」

女は言った。

「お前に力をやる代わりに、私の願いを一つ叶えてもらう」

「王の力はお前を孤独にする。それでも望むか？力を」

ルルーシユはそれに答えた。

「いいだろう！結ぶぞ、その契約！」

「俺に、その力をよこせ！」

1

ルルーシユの意識は、再び倉庫へと戻った。未だ自分の体から血が流れている様子も、痛みがある様子もないことから、ルルーシユは今の会話が、この世の理から外れた力で行われていたことを知った。自身にも、その力の一端が与えられたことを本能で察したルルーシユは、立ち上がり、自分を撃てと命じた男の目を見据えた。

「なあ、ブリタニアを憎むブリタニア人は、どう生きればいい？」

「貴様！」

男は銃を構え直し、ルルーシユを撃とうとしたが、ルルーシユの先程までとは違う雰囲気を感じ、少し不審に思い、撃つのをためらった。

「どうした？撃たないのか？それとも、今更気づいたのか？撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ！」

そうルルーシユが言い、左目を覆っていた手をどかすと、その下にあつた左目から、何かの模様のようなものが姿を現した。男には見えなかつたが、ルルーシユの異様な雰囲気を感じたり、怖気付いたのか、少しづつ後ろに後ずさりしていた。

「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが命じる…貴様達は、死ね！」

ルルーシユがそう命じると、ルルーシユの目の前にいた部隊の男たちは皆、ルルーシユに向けて構えていた銃を自分の首筋に構え直すと、

「Yes, your highness！」

と高らかに宣言すると、一斉に銃の引き金を引き、全員がその場に倒れ伏した。

ルルーシユはその光景を目にし、一瞬だつたが動きを止めた。しかし、顔を歪めると、自分が手に入れた力と、これからの自分の生活を想像するのだった。

## 8話 行動開始

「お前は一体、俺に何をして欲しかったんだ…？こんな変な力まで与えて…」

ルルーシユは、モノ言わなくなつた女の身体を見つめながらそう呟いた。先程は確かにルルーシユの手首に触れたはずなのだが、その肉体は力無く床に寝そべり、とても生者のモノとは言えない様子であつた。ルルーシユがそうして女を見つめていると、ルルーシユの背後にある倉庫の入り口から大きな音がして、ルルーシユは後ろへ振り返つた。そこにあつたのはブリタニア軍のKMF「サザーランド」であつた。

1

サザーランドのパイロットである軍属の女性「ヴィレッタ・ヌウ」は、目の前の光景に驚きを隠せないでいた。クロヴィス第3皇子の命令で、新宿ゲッターをKMFで駆けていたヴィレッタだったが、親衛隊からの信号を受け取りこの場所に来たのだった。

しかし、信号を発した肝心の親衛隊は血の海に沈んでおり、その中心部には、学生と思わしきブリタニア人の少年が1人立っているだけであつた。

(親衛隊が……)ここで一体何が?)

ヴィレッタは、目の前の学生が何か知っているはずだ。そう思い目の前の学生—ルーシユに向かって話しかけるのだった。

1

「貴様、ブリタニア人の学生だな? 一体ここで何があつた! 答えろ! 答えなければ…」

そう言つてKMFから発射された弾丸は、ルーシユの背後の壁に風穴を開けた。ルーシユはそれを受けても舌打ち一つで済ませると、KMFに乗るヴィレッタに向けて、先程と同じ能力を行使しようとした。

「そこから降りろ」

「貴様…何様のつもりだ?」

しかし、結果は先程のようには行かず、ヴィレッタは警戒心を強めた。

(ふむ…やはり直接見なければ効力を發揮することはできないか)

ルーシユは心の中でそう結論づけると、続けてこんな嘘を吐いた。

「私は、アラン・スペンサー。父は侯爵だ。内ポケットにIDカードが入っている。確認の後、保護してもらいたい」

ヴィレッタも、相手が侯爵だと言われればその真偽を確かめるほかない。まして、爵

位を欲して騎士になろうとしているヴィレッタにとって、たとえほんの少しでもその可能性があるのなら、自分の手で確認しなければ出世への道を断たれることになりかねない。そう思い、ヴィレッタは直接確認することにした。

ヴィレッタは外に出ると、銃をルルーシユは構えながら、ゆつくりとルルーシユに近づいていく。ルルーシユは、その瞬間を待っていた。

「手は上げたままである。IDは私が確認する」

そう言いながら近づいてきたヴィレッタに対し、ルルーシユは再び能力を行使する。

「よこせーお前のナイトメアをー」

ルルーシユがヴィレッタにそう言った瞬間、ヴィレッタは手に持っていた自身の機体の認証キーをルルーシユに投げ渡すと、その機体のパスワードを言った。ルルーシユは顔を歪めると、「ありがとう」と言って、ヴィレッタが乗っていたサザーランドに乗り込むのだった。

1

スザクが意識を取り戻したとき、そこは意識を失うまでいた地下道ではなく、どこかのベットのの上だった。目の前には見慣れない、白衣の男性と軍の制服を着こなす女性が

いた。

「あの……ここは……？」

「ん？ああ、まだ新宿ゲットーだよ」

「ここは救護車。クロヴィス殿下の居る本陣の中にあるから、この戦場で最も安全な場所といってもいいわ」

その後、女性が無かを手を持ってスザクの前に差し出した。

「スザク君、これが君を守ったのよ」

「スーツ内での跳弾を防いだだけなんだけどね。何か大切なものなのかい？」

女性の手の上にあつたのは、銀の懐中時計だった。表面のガラスはひび割れていて、長針と短針も止まってしまっていた。もう2度と時を刻むことはないだろう。

スザクは、白衣の男性の言葉を遮った。そして、ルルーシュのことを聞こうとしたが、思い留まり、現在の状況を聞いた。

「あの、ルルー……。現在の状況はどうなりましたか？」

「カプセルが爆発して、毒ガスが撒き散らされたみたいだよ。イレブンにも大量に被害が出たみたい」

「犯人はまだ捜索中だそうよ」

「そうですか……」

スザクはそう言ったが、内心では複雑な心境を抱えていた。毒ガスだと聞かされていた球体の中には、拘束服を着せられた女性が入っていた。一緒にいたルルーシユの安否も気になる。延々と続く思考を遮ったのは、白衣の男性の言葉だった。

「枢木一等兵。君、KMFの騎乗経験は？」

「はっ？ イレブン出身者は騎士にはなれませんが…」

「なる方法があると言ったら、どうする？」

白衣の男性の手に握られていたのは、KMFの認証キーだった。

「おめでとう！ 世界でたった一つのナイトメアが君を待っている。なれば変わるよ。君も、君の世界も」

「望もうと、望むまいとね…」

1

「ブリタニアめ…！ よくも！」

「カレン！ グラスゴーはまだ動くか!？」

「大丈夫！ 私が囷になるから、扇さんたちは市民のみんなの救助を！ 捕まるのは私たちレジスタンスだけで！」

現在新宿ゲッターでは、テロリストの殲滅作業が行われていた。その過程で民間人も殺されており、グラスゴーに乗る「カレン」と呼ばれたレジスタンスの少女は、怒りに身を任せてブリタニア軍を攻撃するのだった。

1

ルルーシユは、先程ヴィレッタから奪ったサザーランドのкокピット内で電話をかけていた。

「あつ、もしもし？ルル？やつと繋がった！今どこで何してるの！」

電話の相手は「シャーリー」と言つて、ルルーシユと同じ学園に通う女子生徒だった。ルルーシユはシャーリーの言葉を無視すると、近くに情報を発信するものがないか尋ねた。

「シャーリー。近くにテレビはあるか？なければラジオでもいい」

「ちよつと待つてね。ごめん、これ貸して！」

シャーリーは更衣室でテレビを見ながら着替えをしていた友人からテレビを借りると、ルルーシユに次の指示を仰いだ。

「それで？何すればいいの？」

「ニュースを見てくれ。新宿付近で何か情報はないか？」

「交通規制がかかっているぐらいで、他には特に何も無いみたい…。それよりルル？また賭け事でもやってるんじゃないでしょうね！」

「そうか、ありがとう。悪い、シャーリー。妹に伝えておいてくれ。今日は帰りが遅くなるって」

シャーリーのお説教が始まりそうなのを遮って、ルルーシユはシャーリーとの電話を切った。

1

ルルーシユは、サザランランドのスクリーンに周辺の地図を映すと、先程シャーリーから聞いた情報を元に、戦場について考えていた。

（情報がおおっぴらに公開されている以上、援軍は来ないだろう。つまり、盤上の駒はこれだけか…）

先程見つけたチェスの駒をいじりながら、ルルーシユは考えた。

（この包囲網の中を1人で突破するのは難しい。かと言って、助けを求めたところで帰って危険だ…）

ルルーシユは一度コクピットから出ると、銃声の響く空の下で決意を露わにした。  
「俺を巻き込んだ責任…必ず取ってもらおうぞ」

1

カレンは今、2機のサザランに追われていた。カレンのグラスゴーは左腕が破壊されてしまっていたし、相手も相当の手練れだったため、防戦一方となってしまう。このままでは負けてしまう。そう思っていたカレンの元に一本の無線連絡が届いた。カレンのグラスゴーの無線は回線が秘匿されているため、一般使用することのできないものだった。カレンはその声を警戒した。

「西口だ！線路を利用して西口に向かえ！」

「誰?! 一体どうやってこのコードを！」

「誰でもいい！勝ちたければ私に従え！」

「勝つ…!?!」

謎の声の“勝つ”という言葉に、このままではどうにもならないことを知ったカレンは、その声に従い、線路へと機体の進路を変えた。

「全く、逃げるだけでは狩りにならないだろう」

カレンを追う2機のサザーランド。そのうちの1機に乗るジェレミアは、そうやって余裕の笑みを浮かべた。

1

線路を利用し、西口に向かうカレン。その後ろからは2機のサザーランドが迫っていた。絶体絶命だとカレンが諦めかけたその時、無線から先程の声 flowed。

「列車に飛び移れ！」

「分かった！」

声に従い、カレンは対面から走ってくる電車の上に飛び乗り、そのまま真っ直ぐ進んでいった。2機のサザーランドは反応が遅れてしまったのかそのまま列車に衝突したが、ジェレミアの乗る機体が列車を止めると、もう1人に指示を出した。

「お前はあのグラスゴーを追え。私はここから奴を狙う」

「分かりました」

そういつて、サザーランドが列車の陰から飛び出した瞬間、それは銃撃に晒されて、一瞬のうちに破壊されてしまった。

「何?!」

ジェレミアはすぐに線路から降りると、柱の陰に身を隠して射線の方向を見た。ジェレミアの視線の先には、崩れた廃ビルがあり、そこにはブリタニア軍のサザーランドがあった。

「バカな！狙うべきはあの片腕のグラスゴーだろう!」

ジェレミアは混乱したが、自身の方へ向かってくるグラスゴーを確認すると、一時撤退を選んだのか、そのまま軍の本部がある方向へと姿をくらました。

「ありがとうございます!」

そう言つて、カレンがジェレミアと同じ場所を見ると、そこにはすでにサザーランドの姿はなかった。

カレンが困惑していると、外から仲間の声が聞こえた。

「カレン、無事か!」

「ええ!扇さんたちもあの指示を?」

「ああ、それでこの場所に来るように言われたんだが…」

カレンと、仲間たちのリーダーである「扇」が話していると、無線からまた声が聞こえた。

「来たか…列車のコンテナを開けろ!それを使って勝ちたくば、これより我が指示に従え!」

テロリストたちがコンテナを開けると、そこにあつたのは大量のサザンランドだった。扇は仲間たちに謎の声に従うように言うと、次の指示を求めたのだった。

1

「ふう、意外と疲れるな……」

先程までテロリストたちに指示を出していたのはルルーシュだった。ルルーシュは、黒のキングをその手で持ちながら、冷や汗を1つ流した。

「しかし、やりとげる決意は必要だ。これは、命を賭けた『ゲーム』なのだから……」  
ルルーシュの顔には、微かではあるが、確かに笑みが浮かんでいた。

## 9話 再会

軍の本部で、クロヴィスは現在の戦況を確認していた。前面に置かれたパネルには、新宿ゲッターの地図と自軍のKMFの状況が示されていた。

「一般のイレブンに混じって、テロリストどもが多少の抵抗をしているようですが、我が軍の圧倒的優位は変わりません。やはりラウンズの力など使うまでもありませんでしたな」

「当然だ。それより、毒ガスのカプセルはどうなっている？」

「はっ、現在中身を捜索中です。見つかり次第、また連絡を」

「よし。全軍、そのまま殲滅を続けろ！」

クロヴィスは、自軍の勝利を疑うことなくそう指示を出したのだった。戦場のどこかで、反撃の狼煙が上がったことも知らず…

1

「なあ、扇い！本当に得体のしれないやつ言うことなんて信じていいのかよ！この機

体だって罨かもしれないだろ!」

「どうせ何もしなければ俺たちは終わっちゃう!それに、今の状況であいつらが罨なんて仕掛けるはずがない!彼を信じよう!」

メンバーからの反対の声もあつたが、レジスタンスのリーダーである扇は、謎の声に従うことに決めた。先程の戦闘や、このサザールランドを見るに、彼に従った方がこの戦いに勝てそうだったからである。何もせずに終わるなら、何かを為して終わりたい。扇はそう考えていた。

「…よし、10分経つたな。それでは、君たちに次の指示を与える!」

聞こえてきた謎の声の正体に疑念を抱きながらも、レジスタンスは全員リーダーに倣い、謎の声に従うことにした。しかし、次の瞬間に聞こえてきた指示の内容に耳を疑うことになるのだった。

1

(よし、テロリストどもが俺の指示の通りに動いてくれるなら、障害はクリアしたも同然。この勝負、勝てる…!)

ルルーシユは廃ビルに隠れながら、そう考えていた。自分からは相手のKMFの位置

が全て分かるし、そこから敵の動きを推測することも容易で、ルルーシュは正にストラテジーゲームのように相手を追い詰めようとしていた。

「:よし、10分経ったな。それでは、君たちに次の指示を与える!」

「P2、P3は今から233秒後に、目の前の壁に向かって銃を乱射しろ!そこに敵が来る!」

「なっ!そんなの信じられないだろ!」

ルルーシュの出した指示に、当然レジスタンスからは反対の声が届いてきた。しかし、それを遮ったのはまたしてもリーダーである扇だった。

「構えろ!」

「扇!でもよお…」

「俺は彼に乗る、そう決めたんだ」

「ちっ、分かったよ。おい、お前!嘘だったら承知しねえからな!」

「おい、玉城!」

レジスタンスの中でも特にうるさかった男。「玉城」と言うらしい。ルルーシュは、彼のこと嫌いなになった。一方、扇のについては、「話がわかる奴もいる」と、少し評価を上げていた。

「そろそろ時間だぞ!5秒前!4、3、2、1、撃て!」

ルルーシユの指示に合わせて、レジスタンスの指示された面々は、目の前の壁に銃弾を放った。すると、その向こうで敵のサザーランドが爆発する音が聞こえて、レジスタンスたちは作戦の成功を悟った。

「嘘だろ……」「凄い……」

そういった声が流れる中で、ルルーシユは冷静に次の指示を出す。最初の撃破で、今までは半信半疑だったレジスタンスも素直にその指示に従うようになり、結果、相手のサザーランドは軒並み壊滅状態に陥り、レジスタンスたちは殆ど無傷でいた。今この瞬間、戦況はルルーシユの率いるレジスタンスに完全に傾いたのだった。

1

一方、ブリタニア軍の本部では、将軍や参謀達が、次々と不利になっていく戦況を見て顔を青ざめさせていた。

「ラスゴー隊もやられました！」「他から早く応援を回せ！」「ダメです！どこもテロリストどもに攻撃されていて！もう動かせる隊もありません！」「何か策はないのか！」

眼前で行われる、まるで意味を持たない戦術会議に業を煮やし、クロヴィスは座っていた豪華絢爛な椅子から勢いよく立ち上がると、大声で叱責を飛ばした。

「なんたる失態か！テロリストどもにいいようにやられおつて！」

そう言いながらクロヴィスは、新宿ゲッターの地図が映し出されている画面の1点に指を置き、こう指示を出した。

「どうせこの場所にテロリストどもがいるのだ！包囲を説き、残る全軍をここに向かわせろ！」

「しかし殿下！それでは本陣の守りも……」

「この場所までテロリストが来ることなどない！いいから早く機体を回せ！」

クロヴィスからの突然の指示に混乱を隠せない軍のトップ達だったが、クロヴィスの命令に逆らうことなどできず、結局その命令通りに部隊を動かした。しかし、テロリストの罠にはめられてしまい、その場所に集めていた全てのKMFが反応を消失させてしまった。

それを見た本部の人間は皆顔を青ざめさせたが、直後に入ってきた通信に驚きを隠せなかった。

「は〜い！殿下、まだお困りですか？」

「貴様！ロイド！特派の分際で再び殿下に何の用だ！」

通信の相手は、先程スザクを救った「ロイド」という人物だった。クロヴィス相手にも、人をおちよくなるような口調と声色で話しかけていた。先程の失態と合わせて軍部の

者達の顔はもう真っ赤だった。

「よい！それよりもロイド！貴様の”おもちゃ”であれば、この戦況を逆転できるのか  
！」

「お任せください、殿下」

実は先程、1度特派の申し出をクロヴィスは断っていた。その手前、ロイド率いる特派の連中に頼むのは気が進まなかったが、それよりも今、”視察”という形でエリア1-1に來ているラウンズにこの失態がバレ、本国に報告されるよりはマシだと思った。

しかし、ロイドに指示を出した後入ってきた部下の言葉で、クロヴィスは自身の対応が遅かったことを知った。

「ラウンズ、アールストレイム卿が、我が軍のサザーランドで勝手に戦場に出てしまわれました！申し訳ありません！我々では止める権利もなく……！」

1

「クロヴィス殿下からの許可は下りたよ。行けるかい？スザク君」

「はい。でも、どうして僕なんか……」

「まあまあ、そういったのはまた後で」

スザクは、パイロットスーツに着替えていた。手には、先程渡された認証キー。名前は「Z-01 ランスロット」と言い、世界で唯一の第7世代KMFということらしかった。しかし、スザクにはそんなことは些細なことだった。

「作戦内容を確認します。作戦内容は、敵戦力の無力化、および排除です。」

作戦を心の中で復唱すると同時にスザクは思った。

（この力さえあれば、この戦いを止められる！誰も傷つかずに済む！）

「共同開発兵器、Z-01ランスロット、発進！」

そして、スザクが戦場に降り立った時、全てのピースが揃うのだった。

1

ルルーシュは、手の上でチェスの駒を転がしながら、戦場の様子を見ていた。自分の指示で動く駒が、相手の駒を次々と倒していく。自分の思い描いたシナリオが盤上に現れるのを見て、ルルーシュはほくそ笑んでいた。今戦場に残る敵機は、最初に抱かずに比べると雀の涙ほどになっていた。

それゆえに、ルルーシュは油断していた。これで勝つたと。しかし、現実ゲームのようには甘くなかった。

「助けてくれ！こちらP3！今、見たことも無いKMFが！うわあああ！」

「くそ！こちらP5！なんなんだこいつは！早すぎる！実弾も弾かれた！」

「一体何が起こっている！おい！」

ルルーシユには訳がわからなかった。もうこの勝負は自分の勝ちだと思っていたし、今更どうこうなるなんて考えてもいかなかった。それ故に対応が遅れてしまった。ルルーシユが気付いた時には、目の前に白いKMFがその姿をさらしていたのだった。ルルーシユは知る由もないが、その機体はランスロットであり、乗っているパイロットはスザクだった。

戦場で、親友は再び相対するのだった。

「なんなんだ！お前は！」

ルルーシユは、乗っているサザーランドの武装で応戦しようとするが、実弾は腕のシールドのようなものに弾かれてしまった。

ルルーシユはKMFの操縦経験などなかった。相手のKMFは殴りかかってきたが、その一撃に、ルルーシユは反応できなかった。しかし、相手の拳がルルーシユにあたる直前、片腕のグラスコーがそれを防いだ。

「逃げてください！早く！」

それを見たルルーシユは、迅速にその場を抜け出した。崩れていか廃ビルを後ろ目に

見ながら、ルルーシユはこれからのことを考えるのだった。しかし、安心したのもつかの間、ルルーシユの背後からランスロットが迫ってきていた。それも驚異的なスピードであり、このままではすぐにルルーシユは追いつかれてしまう。

「なんなんだあの化け物は！」

このままでは追いつかれる。そう思ってルルーシユが後ろ向きに銃を構えようとしたその時、ランスロットは突然空中に飛び上がると、崩れた建物から落ちてくる女性と子供を助けたのだった。それを見たルルーシユは、一気に力が抜けた。

「なんだアイツは…戦闘の最中に人助けだと？ ふん、まあいい。おかげで俺は逃げられるんだからな」

しかし、ルルーシユはまたしても戦場で油断してしまった。そして、その油断が一瞬の命取りとなった。

ルルーシユが気を緩めた瞬間、突如として近づいてきたサザーランドに、ルルーシユの乗るサザーランドは馬乗りにも倒されてしまったのだった。

1

時は少し遡り、ルルーシユが廃ビルを脱出した直後。ルルーシユの乗るサザーランド

を背後から追跡していたスザクだったが、目の前に女性と、赤子が落ちてくるのを見て、追跡を続けるのか、それとも助かるのか、一瞬の戸惑いが浮かんでしまった。ちようどその時、ランスロットの通信に、若い女性の声が聞こえた。

「あなたはその人たちを助けてあげて。私が奴を捕まえる」

「分かりました！お願いします！」

そうしてスザクは、人命救助に当たったのだった。

1

(くそ！油断した！)

ルルーシユは今の状況をどうやって打破しようか考えていた。しかし、どれだけ必死に考えようとも、自身が動けない時点で詰みのようなものだった。ルルーシユに残された手段は、相手の目を直接見ることと命令を下すことしか無かったが、テロリストだとバレている今の状況で怪しまれないように相手に顔を見せるのは無謀のような気がした。

ルルーシユがピンチに焦っていると、頭上のサザーランドのкокピットが開き、中から1人の少女が姿を現した。そして、その姿を見たルルーシユは、刹那のうちに思考を

止め、その姿に見入ることになってしまった。

「…アーニヤなのか…？」

そこにいた少女を見て、かつて共に過ごした初恋の少女の姿をそこに幻視したルルーシユは、そう小さくつぶやきを漏らしたのだった。

## 10話 2人の逢瀬

「…アーニヤなのか…？」

ルルーシユは思わずそう小さく呟いてしまう。最後に会ったのは8年前で、ルルーシユ自身もアーニヤも小さかったため、記憶を頼りにするのは少々不安な気もしたが、それでもルルーシユの目の前にいる少女は間違いなくアーニヤであるとルルーシユは思った。

ルルーシユは思わず乗っていたサザランドのコクピットから飛び出した。普段の冷静なルルーシユであったなら、こんな突発的な行動は取らなかつただろう。しかし、ルルーシユは今、平静とはかけ離れた精神状態の中にいた。

「アーニヤー！」

ルルーシユは、コクピットから飛び出しながら目の前の少女にそう呼びかけた。そこに策などはなく、8年前から続く純粋な想いがあつた。そして、目の前の少女は、ルルーシユの姿を見てその動きを止めた。

「…ルルーシユ？」

そのつぶやきがルルーシユの耳に入った瞬間、ルルーシユは思わずアーニヤの元へと

駆け寄ろうとした。しかし、よほど焦っていたのか、はたまた慣れないKMFの操縦で疲れていたのか、ルルーシユはサザランの機体の上で足を滑らせてしまう。ルルーシユは、滑り落ちる自分の体をまるで他人事のように考えていた。目の前にアーニヤがいるのも、何かの夢なのかもしれない。そうも考えた。

そして、ルルーシユは目を閉じ、浮遊感に身を投げ出した。しかし、地面にその体がぶつかる直前、何かに支えられるようにルルーシユの落下が止まった。何かとルルーシユが目を開けると、目の前にはアーニヤの顔があった。つまり、ルルーシユはお姫様抱っこをされていた。

「なっ！おい！離せ！」

ルルーシユは恥ずかしさのあまり、ここが敵地だということも忘れて叫んでしまう。アーニヤはルルーシユを地面に立たせると、そのままルルーシユに抱きついた。

「ルルーシユ！本当にルルーシユ!？」

「ああ！俺だよ！アーニヤ！」

「ルルーシユ！」

ルルーシユとアーニヤは、互いの名を呼びあうと、その存在を確認するかのようによく抱き合った。2人は、唐突な再会に涙していた。それは、別れの時とは違う、喜びの涙だった。

「本当にアーニヤなんだな？」

「うん。ルルーシユ」

ルルーシユとアーニヤはいまだに抱き合っていた。まるでもう離さないと云っているかのように、2人はその腕を緩めようとはしなかった。しかし、その均衡を破ったのはルルーシユだった。

（む、胸が！いや、胸…なのか？）

ルルーシユは、押し付けられたアーニヤの胸を意識してしまっていた。しかし、アーニヤは良く言えば発展途上、悪く言えば貧しかった。そのため、ルルーシユは自分の感じているものが本当に胸であるのか判断がつかなかった。

そんな不埒な考えを悟ったのだろうか、アーニヤはルルーシユから手を離すと、そのまま体を後ろへと引き、胸を隠しながらこう言った。

「私にも、ある…」

わずかに赤面してみせるアーニヤの様子に、ルルーシユはもうノックダウン寸前だった。思わず鼻を抑えたルルーシユだったが、あらまめてアーニヤに目を向けた時、その

格好に驚いた。なぜなら、アーニヤがサザーランドから出てきたときに、軍属であるだろうことはルルーシュにもわかっていた。まして、自分がそうなるように望んだからだ。しかし、これは想定外だった。

「アーニヤ…、そのコートは？」

アーニヤは、通常の軍服の上に、装飾の施されたピンクのコートを羽織っていた。彼女の髪の色と同じ色で、とてもよく似合っていたが、ルルーシュが着目したのはその存在自体にある。

なぜなら、色付きのコートの着用を許されているのはブリタニア帝国の上位12名の騎士「ナイト・オブ・ラウンズ」のみであったからだ。そして、ラウンズが守るのは、ルルーシュがこの世で最も憎む男。第98代ブリタニア皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアであったからだ。

故に、ルルーシュは質問した。返答次第によつては、彼女に謎の力を行使することを考えて。しかし、アーニヤの返した言葉は、ルルーシュの予想を上回るものだった。

「ああ、これ？ ジエレミアがなっておけて。ルルーシュが生きていたら必ず役に立つって言ってたから」

「つまり、それは俺のためということか？」

「うん」

ルルーシユは驚いた。アーニヤが自分のためにラウンズという、帝国では最上級に位置する地位を保持していたこと。そして、ジェレミアがアーニヤにそれを進めたことである。ジェレミアとルルーシユはそこまで面識があるわけではなかったのだ、なおさらだった。

「アーニヤ、ジェレミアが協力してくれたのか？」

「結構。これもジェレミアの。私の専用機はまだできてないから……」

ルルーシユは、ジェレミアの評価を上げると同時に、警戒心を増した。ジェレミアがロリコンで無いことを願うばかりであった。もしそうであったなら、ルルーシユはジェレミアを処理しなければならないからである。

「アーニヤ、ジェレミアと話がしたい。あとで連絡を取ってもらえないか？」

「？もちろん」

ルルーシユのどこか鬼気迫る様子を不思議に思いながらも、アーニヤはそれを了承した。

それから2人は色々なことを話した。今までの生活を互いに言い合つて、笑ったり、ときには泣いたりもした。ここが戦場場だということを忘れるほど、2人は話を続けた。今までの会えなかった時間を埋めるように……

「アーニヤ」

「何?」

「俺はこれから、ブリタニアを潰す。俺に、協力してくれないか?俺には、君が必要なんだ。」

「良いよ。私もルルーシュと一緒に戦う。だって私は、あなたの”騎士”だから」

ルルーシュは、まっすぐアーニヤを見つめた。アーニヤは、ルルーシュの顔を見た。2人とも頬が赤みを帯びていた。影が1つになった。甘い味がした。

1

ルルーシュは、ブリタニア軍の本部に来ていた。

「お久しぶりです、兄上」

「貴様…いったい何者だ!」

「覚えてませんか?小さい頃チェスをしましたよね?アリエスの離宮で。全て僕の勝ちでした。」

「まさか、お前は!」

ルルーシュは、クロヴィスに銃を向けたまま不敵に微笑むのだった。

## 11話 日常と非日常

「お前、まさかルルーシユなのか？」

「ええ、お久しぶりでです兄上」

ルルーシユはブリタニア軍の本部、クロヴィスのいる場所へ乗り込んできていた。その他には拳銃が握られており、その標準は常にクロヴィスに向けられている。

「いやあく。ルルーシユ、生きててよかつた！日本侵攻の時に死んだと聞いていたから……」

クロヴィスは、その言葉とは裏腹に、怯えた様子でルルーシユに声をかけた。当然である。腹違いの弟とはいえ、自らが拳銃を向けられていれば、恐怖の感情が濃く出てしまふからだ。

さらに、クロヴィスはルルーシユが死んだと思っていた。いわば、今のクロヴィスにとってのルルーシユは、亡霊のようなものである。

「どうだい、ルルーシユ。私と一緒に本国に……」

「また俺たちを外交の道具にするつもりか？」

クロヴィスの保身に走った言葉に、途中で被せるようにルルーシユは自らの境遇についてをクロヴィスに語った。それは、クロヴィスにルルーシユ自身の立場を思い出させる行為であつた。

「俺たちが日本に送られたのは、母さんが殺されたからだ。母さんは皇妃とも言えども、元は庶民の出だつた。それを他の皇妃たちに恨まれて殺されたんだ！」

ルルーシユは、怒りのあまり我を失いそうになつていた。本来の目的も忘れ、ルルーシユが銃の引き金に指をかけたその時、2人は扉の開く音を聞いた。そして、入つてきた人物を見て、クロヴィスは目を輝かせた。その顔は水を得た魚のようで、歓喜に染められていた。

「おおー！アールストレイム卿！さあ、早くこの私を助けてくれー！」

入つてきたのは、アーニヤだつた。アーニヤはルルーシユの元まで近づくと、その手をルルーシユの手に重ねた。

「ルルーシユ、あなたの目的を忘れちゃダメ」

それを聞いたルルーシユは我に帰り、アーニヤに「ありがとう」と言つた。

それを眼の前で見ていたクロヴィスは、今までの喜色に満ちた表情から一転して、絶望に彩られた表情に戻つていた。

「ど、どうして！アールストレイム卿！そいつは私を殺そうとしているのだぞー！」

「あなたの生死は関係無い。私は、ルルーシユについていく」

クロヴィスに淡々と返すアーニヤ。その様子を見て、クロヴィスはあることを思い出した。

「そうか…お前は、アリエスの離宮でルルーシユたちと一緒にいた！」

「もういい。お前はただ俺の質問に答えればいい」

クロヴィスが、激情しそうになると、ルルーシユは下ろしていた拳銃を再びクロヴィスに向けた。クロヴィスが大人しくなるのを確認すると、アーニヤに声をかける。

「アーニヤ、人よけはどうなっている？」

「問題ない」

「そうか…。さあ、クロヴィス！答えてもらおうか！母さんを殺したのは誰だ！答えろ！」

ルルーシユはアーニヤから周辺の安全を確認すると、クロヴィスにあの力を使った。瞳は赤く、何かの紋様を映し出していた。クロヴィスは、ルルーシユの命令を聞くと、その身体から力を抜きダラリとなると、ルルーシユの質問に答えた。

「私じゃない。シユナイゼルと、コーネリアが知っている」

ルルーシユはそれを聞くと、再び拳銃の引き金に指をかける。

「ルルーシユ、ここは私が…」

「いや、大丈夫だ。これは、俺がやる」

「そう…。分かった」

ルルーシユとアーニヤがそんなやりとりをしていると、クロヴィスは我に返って、ルルーシユたちに向けて叫んだ。

「バカな！ルルーシユ！考え直せ！母は違うと言えど、実の兄弟だぞ！」

「…さようなら、兄さん」

ルルーシユが、指に力を込める。世界に一つ、赤い花が咲いた。

ルルーシユは、震える手を下ろした。その手を、アーニヤの小さな両手が包んでいた。

1

「こら！ルルーシユ！」

ルルーシユの頭に、軽い衝撃が走った。感触からするに、丸めた紙で頭を小突かれたようだ。ルルーシユは、正面の女性を見据える。

「ルルーシユ、今寝てたでしょ？」

「嫌だなあ、寝てませんよ。ちよつとぼーつとただけで…」

ルルーシユが今いるのは、アッシユフォード学園の生徒会室。そして、たった今ル

ルルーシュを叩いた人物は、この学園の生徒会長であり、学園長の孫娘である「ミレイ・アツシユフオード」であった。

ルルーシュの座る長机には他にも人が座っており、一人はよくルルーシュを賭けチエスへと送っていく生徒会書記のリヴァル。その隣には、ルルーシュのクラスメイトであり、生徒会所属の「シャーリー・フェネット」がいた。

さらに、そこから少し離れた場所に置かれたパソコンの前に座っている眼鏡の少女が生徒会所属の「ニーナ・アインシユタイン」がいた。

この光景こそが、ルルーシュの今の「日常」であった。

1

ルルーシュが予算審査を一旦終え、学園に登校すると、クラスメイトたちが小型テレビを見て何やら言っていた。近づいてみると、昨日の新宿のニュースのことだった。しかしニュースでは、毒ガステロとだけ報道されており、クロヴィスの安否などについては特に触れていなかった。

ルルーシュは、なぜ政府がクロヴィスの死を隠すのか気になったが、思考に没入する前に、シャーリーの声を聞き、そちらに意識を向けた。

「ねえ、ルル。新宿って…」

「ああ、シャーリー。昨日、このことで電話をかけたんだ。知り合いからリアルタイムで聞いていてね」

ルルーシユがシャーリーからの質問にそう答えていると、教室の別の場所から、女子たちの声が上がった。ルルーシユがそちらを見ると、そこには赤い髪の少女が座って、クラスメイトの女子に囲まれていた。

ルルーシユがそちらを見ていると、リヴァルが後ろから肩に手を回して耳元で囁いた。

「なんだよルルーシユ。ああいうのが好みなのか？」

「ああ、いや。彼女…」

「ん？ああ、今日は来てるみたいだな。カレンさん。体が弱くて、たまにしか学校に来ないけど、成績は抜群に優秀。授業に出ないのに勉強ができるなんて、まるで誰かさんみたいだな！」

「余計なお世話だ」

ルルーシユは、リヴァルとの話の最中にも、目の前の「カレン」という少女について考えていた。

（雰囲気は多少違うが、あれは昨日新宿にいた女…！どうりでどこかで…）

1  
昼休み。カレンは友達に誘われ、庭で昼食を食べていた。穏やかな時間が流れていたところに、突然蜂が舞い込んできた。他の女子たちは一目散に逃げ出したが、カレンだけは少しずつ、蜂を刺激しないように距離を取ると、草陰に身を隠した。

「ああーめんどくさい。病弱設定になんてしなきゃよかった」

そう言いながら、目の前に飛んできた蜂を素手で両断するカレン。そして、残っていた昼食のサンドヴィッチを口にくわえると、教室に戻ろうと体の向きを変えた。すると、そこに一人の男子生徒が立っていた。ルルーシュだった。

(やばい…聞かれた!?)

カレンは内心で大きく焦っていた。可能であれば、目の前のこの男を処理しなければならぬ。そう考えていた。

一方、ルルーシュはカレンに近づくと早速力を使った。カレンが力かかったことを確認すると、カレンに質問をした。

「お前、昨日グラスゴーに乗って新宿にいた女だな?」

「はい」

「どうしてブリタニアに対し、テロを起こした？」

「私は日本人だから。ブリタニアの血も半分入ってるけど…」

「ハーフ…!？」

ルルーシユは、多少の驚きを受けたが、それ以降は昨日の新宿の事について聞くだけに留めた。そして、全ての質問を終えると、カレンの目に光が戻った。

「あの、何か？」

「いや、いい。もう用は済んだ」

ルルーシユはそう言って、カレンの元を去ろうとした。しかし、思い出したかのように立ち止まると、念には念を入れるため、カレンに再び力を使った。

「新宿でのことは何もいふな」

「新宿？あなた、一体何を知ってるの！」

しかし、力是不発に終わったのか、カレンの意識ははつきりとしていて、

ルルーシユは大いに焦った。

（バカな！力が発動しない!?!くそ、一体どうしたら!）

「さあ、今の言葉がどういう意味なのか、吐いてもらおうわよ！」

カレンがこちらに近づいてくる。その時、ルルーシユの頭はパニック状態に陥っていた。どうこの場を切り抜けるか、ルルーシユが必死にそれを思考していると、二階の窓

からシャーリーの声が聞こえた。

「ルル〜！カレンさ〜ん！次の時間、理科準備室だから、早く行かないと〜！」  
「やべー！俺、実験器具出さないといけないんだっ！」

ルルーシユは、シャーリーの天然のフリに乗っかる形でその場を走り去った。後には、どこか納得できていない様子のカレンだけが取り残された。

## 12話 暗躍する影

クロヴィス殿下が何者かに殺害された。その一報を受け、エリアーの純血派のトップであるジェレミアは自室から軍部に向かおうとしていた。そして、今まさに部屋を出ようとしたその時、ジェレミアのズボンのポケットが微かに振動した。ジェレミアはその場所に携帯電話を入れていたが、それは小刻みに震え続けており、メールではなく電話の着信であると気づいた。

部下の誰かがクロヴィス殿下の訃報を知らせに電話をしたのだろうか、はたまた、その後の指示を仰ごうとしているのか。とにかく、今は一刻も早く状況の確認に努めなくてはならないと、携帯電話の画面に表示されている名前をチラリと見た時、ジェレミアはドアノブにかけられていた手を引き、その「アールストレイム卿」と表示されている相手からの電話を取った。

「もしもし。アールストレイム卿、今はクロヴィス殿下についての情報の確認が最優先でありますゆえ、急ぎでなければまた後でこちらからかけ直しますが？」

「ジェレミア、周りには誰もいない？」

「ええ、今は自室ですが……」

「そう、なら周囲に誰も近づけないで」

「……分かった」

ジェレミアは一旦電話をポケットに入れ、外に誰もいないのを確認したのち、ドアに鍵をかけ、自室の椅子に腰掛けた。

「それで、要件はなんだ？」

先程からジェレミアは、アーニヤに対する言葉遣いを崩しているが、彼女は幼少期からゴツバルト家、ひいてはジェレミアに世話になっており、2人の間には一種の師弟関係というものが成立しているため、公の場でなければこのような口調で話すのだった。

また、アーニヤが電話をかけてくるということは普段滅多になく、普段はメールでのやり取りであるため、ジェレミアは緊急事態でも起こったのでは無いかと警戒していた。

「話して欲しい人がいる」

「それは一体……？」

アーニヤからの突然の電話、さらに「話して欲しい人」という不可解なセリフ。ジェレミアの胸には大きな波紋が広がっていく。

（アーニヤが私と話して欲しい人だと？軍に属している人間はそもそも私に直接電話を

かけてくるだろうし……。いや、まさか……！」

ジェレミアが思い当たる一つの可能性にたどり着いたとき、耳に男の声が聞こえた。「久しぶりだな、ジェレミア。実に8年ぶりになるか……」

その声に聞き覚えはなかった。しかし、その声の主は容易に想像ができた。なぜならそれは、生涯をかけて仕えると決めた己の主君の、面影を残す、そんな声だったからだ。

「おお……、ルルーシユ様……。よくぞ……無事で……！」

その声には、万感の想いがこもっていた。

「お前も息災だったようで何よりだ。それで、クロヴィス死亡の報告は既に届いているな？」

「はっ、これから事実確認に向かおうとしていたところですよ」

「いや、その必要はない。なぜなら……クロヴィスを殺したのは俺だからだ」

「なんと……！では、ついに殿下自ら動かれるということですか？」

「いや、俺はまだ表立って動けない。俺は8年前に既に死んでいることになっているからな。今お前に頼みたいのは、クロヴィス殺害についての裏工作だ。できるな？」

「お任せください。このジェレミア・ゴッドバルト、これより、我が全てを貴方様のために使います」

こうして、ジェレミアはルルーシユからの支持を受け、枢木スザクをクロヴィス殺害

の容疑者に仕立て上げた。着々とルルーシユの企みは進行していくのだった。

1

「お兄さま！さっきのニユース、スザクさんですよね!?生きてらっしゃったなんて…でも、あのニユースは…」

「大丈夫だよ、ナナリー。スザクがそんなことをしているもんか。きっと何かの間違いだ。すぐに釈放されるよ。だから、今日はもうお休み」

「はい、お兄さま…」

ルルーシユは、ナナリーを寝かしつけていた。本当はアーニヤにも合わせなかったが、それをしてしまえばどこかで足がつくかもしれない。姉妹のように仲の良かった2人を引き離しておかねばならないことは、ルルーシユにとつてまさしく断腸の思いであつた。

「すまない…ナナリー。でも、もう止まるわけにはいかないんだ。俺は、必ずナナリーが、アーニヤが、みんなが笑って過ごせる。そんな世界を作ってみせる。必ず…!」

ルルーシユは本当ならば、ナナリーには嘘をつきたくなかつた。しかし、ナナリーは優しすぎる。だから、汚れるのは自分だけで十分だ。そう決意を固め、ナナリーの頭を

撫でると、自室へと戻っていったのだった。

暗い廊下に朧げに見えるその後ろ姿は、酷く大きく見えた。

1

「……このエリアーの総督であり、敬愛すべきクロヴィス殿下は既におられません。しかし、私たちはこの悲しみに耐えなければいけないのです。……」

翌朝、学校に登校したルルーシユを待つていたのは、クロヴィス死亡の追悼式であった。改めて自分がしたことを目の当たりにすると、気分が悪くなるのを感じた。実際、クロヴィスを殺した直後は堪えきれずに吐いてしまい、アーニヤを心配させてしまっている。好きな女性の前でもう無様な姿を見せないためにも、ルルーシユは自身のやったことを正面から受け止め、そして自分の糧へとしていた。

そして、それと同時にルルーシユはカレンの方へと意識を向けていた。彼女と解放戦線をどう操るのか、それがこれから先最も重要になってくる。それらをどう利用すべきか、ルルーシユはそれを考えていた。

追悼式が終わった後、ルルーシユが教室へ戻ろうとしていると、シャーリーが声をかけてきた。

「…ルル！ちよつと、ルルってば！」

「ん？なんだ？シャーリー」

「なんだじゃないわよ、もう！いつつも人の話なんて聞いてないんだから！」

「ごめんごめん、それで、何の話？」

「純血派って何？」

「ああ、それはブリタニア軍はブリタニア人のみで構成されるべきだっていう考えを持った人たちだよ。今軍部で一番力を持っているらしい」

「ふーん、そうなんだ…」

そんな会話をしていると、ルルーシユの背中をリヴァルが軽く小突いてきた。

「ルルーシユ、今日これからどうする？今日は授業もないみたいだし、久しぶりにやりに行くか？」

「もう！賭け事はダメよりヴァル！それに、ルルも！」

「ああ、そうだな。もうやめるよ。それに、もっと手強いのを見つけたしね…」

2人が顔を見合わせ、頭の上に疑問符を浮かべているなか、ルルーシユの目にはカレシンの姿が写っていたのだった。